

# オーバーツーリズムとレスポンシブルツーリズム

菅原 達也

大正大学 地域構想研究所 客員教授

(要旨) 本論文は日本各地で顕在化するオーバーツーリズムの問題点—環境破壊、住民生活への悪影響、観光体験の質の低下—を分析し、これらの課題を解決するためのレスポンシブルツーリズムの導入可能性を検討する。オーバーツーリズムの事例研究を通じ、観光客の分散化、入場制限、地域との共生など具体策を提示し、観光業者や自治体、住民、観光客が協働して持続可能な観光地運営を実現するための考え方を提案するものである。

キーワード: オーバーツーリズム、観光行動、サステナブルツーリズム、レスポンシブルツーリズム、マストツーリズム

## 1. はじめに

日本の観光産業は、インバウンド（訪日外国人観光客）の増加により経済的恩恵を受けてきたが、同時にオーバーツーリズム（観光地が過剰に観光客で混雑し、地域社会や環境に悪影響を及ぼす現象）の問題が顕在化している。観光庁がインバウンド推進政策を進めてきているが、その背景には、経済的、政策的、社会的な要因が複合的に絡み合っている。

### (1) 経済的な背景

少子高齢化と人口減少が進行し、国内市場の縮小が課題となっている。地方では経済活動が停滞し、過疎化が進んでいる。これらの経済的な要因の背景の中で外国人観光客の消費に頼る事は日本の経済にとって重要な収益源となっている。

### (2) 政策的な背景

日本政府は2003年「観光立国」を掲げ、観光を成長戦略の一環として位置づけた。この政策では、観光を日本の主要産業とすることを目指し、訪日外国人観光客数の目標を定めている。2020年には東京オリンピック・パラリンピックを契機にインフラ整備や多言語対応の強化が進められ、観光政

策が推進された。同時にアジア諸国を中心にビザ発給条件の緩和や電子ビザの導入を進めた結果、外国人観光客の増加に貢献した。

### (3) 社会的背景

世界的な中間層の増加やアジア諸国の経済成長により、海外旅行への需要が高まっている事があげられる。日本は地理的にもアジア諸国に近く、寿司やラーメンなどの日本食、アニメや漫画、伝統文化（茶道、着物、温泉など）に対するアジア諸国はもとより、世界的な注目が高まり、多くの外国人が日本を訪れる動機となっている。

一方で、インバウンド（訪日外国人観光客）の増加により経済的恩恵を受けてきたが、同時にオーバーツーリズムの問題が顕在化してきている。

以下では、インバウンドが増加する事による「光」とオーバーツーリズムの発生による「影」をそれぞれ解説し、オーバーツーリズムの発生原因や課題、現状の対策を日本の観光地を事例として、インバウンドの増客の効果とその反動としてのオーバーツーリズムを比較検討する。また、オーバーツーリズムは観光客のモラル向上と観光地に暮らす地域の人達の協力等、関係性がレスポンシブルツーリズム(Responsible Tourism)として

の今後の観光の潮流になり得る事を予見させる。

## 2. インバウンドの増客による「光」とオーバーツーリズムの「影」

日本の観光産業は、インバウンド（訪日外国人観光客）の増加により経済的恩恵を受けてきたが、同時にオーバーツーリズムの問題が顕在化してきている。以下では、インバウンドによりそれぞれ「光」の影響、つまり恩恵を受けてきた事例と、また同時にオーバーツーリズムが及ぼす「影」の影響とは何を指しているのかを解説する。外国人を中心とした観光客の増加がそれぞれ日本にその「光」と「影」の影響をこのあとそれぞれ事例をあげて解説する。

## 3. インバウンドの増加による恩恵とは

### (1) 地域活性化（ニセコ町の経済活性化）

インバウンドの増加は光の部分として地域経済の活性化が考えられる。外国人を中心に観光客の増加により、宿泊施設、飲食店、小売業など地元の経済活動が活発化してくる。そうなる観光消費は直接的な収益をもたらす、観光地の雇用創出や地元企業の成長につながり、観光関連の税収の増加も期待できるようになる。この為、多くの地域で外国人を中心とした観光客誘致に力を入れている事が理解できる。

ニセコ町では 1980 年代後半から外国人観光客の増加によって、地域経済が劇的に活性化した代表例である。特に冬季にはパウダースノーが世界的に評価され、多くのスキー・スノーボード愛好者を惹きつける観光地となった。ニセコ町にはオーストラリアやアジア諸国（特に香港、シンガポール）の富裕層観光客が訪れるようになり、高級ホテル、コンドミニアム、別荘の需要が急増した。外国人向け宿泊施設の建設ラッシュが続き、外国人観光客は地元の飲食店やお土産店を積極的に利用し、地域経済への直接的な消費が拡大してきた。雇用創出では観光産業の成長により、宿泊業、飲食業、交通業、アクティビティガイドなど、地域内で多くの雇用が生まれてきた。冬季観光シーズ

ンには臨時雇用も増え、地元住民にとっての経済的メリットが広がってきた。

### (2) 伝統文化や地域資源の保存と発信（京都市「京町家」の保存と発信）

多くの観光客が訪れることで、地域の伝統文化や祭り、工芸品などの価値が再認識される機会が増える。観光資源として活用することで、それらを保存・継承し、次世代に伝える動機付けとなる場合がある。京都市は、日本を代表する観光地であり、年間多くのインバウンド観光客が訪れる。しかし、近年の観光需要の増加や都市開発の影響により、伝統的な町家建築である「京町家」の取り壊しが進み、その保存が課題となっていた。京町家は、伝統的な木造建築であり、京都の文化的景観を形成する重要な地域資源である。そのため、観光地としての魅力を保つだけでなく、地域文化を次世代に伝えるための保存活動と発信が求められていた。

京都市は、京町家の保存を目的とした「京町家保全・再生条例」を平成 29 年 11 月に制定した。古い町家を取り壊さず、リノベーションを通じて再利用するための助成金制度を整備した。再利用された町家は、カフェ、宿泊施設、ギャラリーなど多目的な用途に転用され、観光客に伝統的な空間を体験する機会を提供している。特に宿泊施設としての利用では伝統的な宿泊施設が、国内外の観光客に人気を集めている。町家での宿泊は、畳や障子などの伝統的な内装を体験できるだけでなく、地域の風情を直接感じられると評判である。宿泊体験が町家の保存と観光資源としての活用を両立するモデルケースとなっている。京町家では、茶道や和菓子作り体験、京扇子や和紙のワークショップなど、京都の伝統文化を学ぶイベントも開催されている。観光客が地域住民や職人と直接交流する機会を設けることで、京文化への理解を深める取り組みが進められている事も町家の重要な役割になっている。この京町家保存の取り組みは文化的な景観の保存、地域経済の活性化、観光と伝統の両立モデルの確立、そして地域コミュニティの再生につながっている。

### (3) 地方創生と過疎化対策（長崎県壱岐市のインバウンド促進）

地方の観光地への観光客誘致が成功すれば、過疎化が進む地域でも経済や社会が活性化し、人々が地域に定住する動機が生まれる可能性がある。観光を通じて地方が再び注目されることで、新たな投資や移住者が増えることも期待される。長崎県壱岐市は日本海に浮かぶ小さな島で、古代からの歴史や豊かな自然、美しい海岸線を有している。しかし、離島であることや人口減少、高齢化の進行により、観光需要が減少し地域経済が停滞してきた。特に若者の流出が課題であり、持続可能な地域経済の再生と人口減少対策が求められていた。その中でインバウンド観光を促進することで、地域外からの消費を取り込むだけでなく、地域の魅力を再発見し、住民の誇りや地域の活力を取り戻す動きが進められた。

壱岐市は、古代日本と朝鮮半島を結ぶ重要な海上交通の拠点であった歴史的背景を活かし、弥生時代や古墳時代の遺跡を中心に観光資源を再編成した。特に「壱岐国分寺跡」や「はらほげ地蔵」など、島独自の歴史を国際的な観点から発信し、海外の文化観光客をターゲットにした。この海外の観光客誘致には 観光案内所やウェブサイト、パンフレットを英語、中国語、韓国語に対応させ、海外観光客が利用しやすい環境を整備した。また、現地ガイドの養成を行い、英語でのツアーガイドサービスを提供することで、観光客の満足度向上を図ってきた。また、観光資源だけではなく、壱岐牛や壱岐焼酎、海産物など、地域特産品をブランド化し、観光客向けのプロモーションを展開した。試飲・試食イベントを実施し、海外市場への輸出も視野に入れた販路拡大を行った。地元の農家や漁業者と協力し、観光客が直接体験できる「収穫体験」「漁業体験」等のプログラムを提供してきた。観光関連業だけではなく、地域住民が主体となる「民泊」サービスを導入し、観光客が地元の家で伝統的な島の暮らしを体験できる仕組みを構築した。

この取り組みは、地域住民の収入増加につながるだけでなく、観光客にとっても地域文化を深く知る機会となった。このような取り組みは①観光

客の増加⇒②地域経済の活性化⇒③地域認知の向上⇒④住民意識の向上と言う、今までの負のスパイラルである悪循環から好循環へと変化してきている。壱岐市の事例は、インバウンド観光を活用して地域経済を活性化し、人口減少や過疎化に対処した成功例の一つである。観光を通じた地域振興のモデルとして、他の地域にも参考になる取り組みと言える。

## 4. オーバーツーリズムの『影』の部分

オーバーツーリズム (Overtourism) の主な問題には以下が含まれている。

- ・環境破壊：自然資源の劣化やゴミ問題
  - ・文化摩擦：地域住民と観光客との間のトラブル
  - ・生活への影響：住民の生活コストの上昇やインフラの逼迫
  - ・観光体験の質の低下：混雑やサービスの劣化
- このオーバーツーリズムの事例を具体的に記述する。

### (1) 環境破壊と自然資源の劣化（富士山周辺の環境問題）

富士山は日本を象徴する世界遺産であり、国内外から多くの観光客を集める観光地である。特に世界文化遺産に登録された 2013 年前後やコロナ前までは順調に訪問者数が伸びてきた。12 年、13 年は 31 万人前後と大幅に伸びた。これにより、登山者や観光客による環境破壊が深刻な問題となっている。具体的にあげると

- ・観光客の急増に伴い、登山道や山小屋周辺でのごみの不法投棄が増加した。特にプラスチック製品や飲料容器が問題となり、清掃活動が追いつかない状況である。
- ・大量の登山者が一度に利用することで、登山道が侵食され、土壌が露出し、雨水によるさらなる劣化が進むことで自然景観が損なわれている。
- ・山小屋のトイレの利用増加により、処理能力を超えた排水問題が発生している。
- ・富士山周辺の希少植物や動物が生育・生息しているが、観光客の影響で生態系が変化し、一部植物や動物の生息地が失われつつある。

このようなオーバーツーリズムの影響を食い止めるべく、環境省や山梨県、静岡県をはじめ地元市町村の関係者が対策、管理、推進している。

#### a) 登山者数の制限（県レベルでの対策）

登山シーズン中の利用者数を制限する取り組みが検討され、混雑緩和と自然保護を目指している。山梨県が吉田ルートの入山制限を実施した（1日4000人）。

#### b) 「富士山保全協力金」の導入（国及び県レベルの対策）

登山者から協力金を徴収し、この収益を清掃活動や登山道の修復に充てている。これにより、ごみの回収やトイレの整備が進められている。

#### c) 環境教育と啓発活動（地元自治体）

観光客や登山者に対し、富士山の自然環境保護の重要性を伝える啓発活動を実施している。情報看板の設置やガイド付きのツアー教育が行われている。

#### d) トイレ・排水システムの改良

山小屋のトイレ設備を改善し、環境に配慮した排水処理システムを導入している。富士山のトイレ・排水システムの改良と管理は、環境省・山梨県・静岡県・地元自治体・富士山世界遺産協議会・民間団体が連携して推進している。特に「富士山トイレ管理運営協議会」やNPOの活動も重要であり、持続可能な登山環境の整備が進められている。

## (2) 地域住民の生活や伝統文化への悪影響（京都の伝統や生活への支障）

観光地の混雑により、地域住民の日常生活に支障が生じる場合がある。たとえば、公共交通機関の混雑、騒音問題、観光客向けの商業施設が増えることで地元住民が利用できる施設が減少するといった問題である。

京都市は、日本を代表する歴史的観光地であり、国内外から多くの観光客が訪れている。特に、2010年代後半からインバウンド観光が急増し、コロナ前の2019年には年間8,800万人以上の観光客が訪れた。しかし、観光客の過密化により、地域住民の生活に悪影響が及ぶオーバーツーリズムの問題が深刻化している。

#### a) 交通機関の混雑

京都市の公共交通機関（バス・電車）は観光客で溢れ、通勤・通学の市民が乗れない状況が発生している。特に、市バスの主要路線（四条通・清水寺行き・金閣寺行き）は観光客で満員になり、地元住民がバスを利用できない事態になっている。対策として、市バスの運行本数を増やす「観光MaaS」や、観光客向けに別ルートの案内を強化している。

#### b) 住宅エリアの民泊増加による住環境の悪化

観光客向けの民泊が急増し、静かな住宅街にも外国人観光客が宿泊するようになった。一部の外国人観光客による夜間の騒音問題（パーティーや大声）、ゴミ出しのルール違反などが住民のストレスになっている。こうした状況の中で、京都市は2018年6月に施行された民泊規制を強化し、「住宅専用地域での無許可民泊禁止」や「管理者常駐義務」を導入して違反の取り締まりに力をいれている。

#### c) 伝統文化・景観への影響

京都の伝統的な町並み（祇園や嵐山）で、観光客のマナー違反（無断撮影・路上飲食・ポイ捨てなど）が多く見られ、特に祇園の舞妓・芸妓が無断撮影や追いかける被害が続出した。これにより2023年には祇園の「私道での無断撮影禁止条例」が制定された。

#### d) 観光客のマナー問題

寺社での騒音・飲食・ドローン撮影など、観光客のマナー違反が問題になっている。例えば、伏見稲荷大社では観光客が鳥居にシールを貼る行為や、清水寺では大声で騒ぐ行為が問題視されている。『2020年「京都観光モラル」と副題を付けた「京都観光行動基準」を定めた。ゴミ問題につながる観光客の食べ歩きが課題となっていた。井上晶子（2021年）』。このような行為に対して、京都市では文化財保護のため、ルールを厳格化し、多言語の注意喚起を強化している。この事例のように京都市内では、観光客の急増によるオーバーツーリズムが交通混雑・住環境の悪化・伝統文化の侵害・物価上昇など、住民の生活に深刻な影響を与えている。その為、市の対策として民泊規制・観光税導入・バス路線調整などが行われているが、

今後も持続可能な観光と地域住民の共存を目指した施策が求められる。

### (3) 観光体験の質の低下（奈良公園のシカへの餌やり問題）

観光客にとって奈良公園のシカは、人気があるが、訪問者の増加に伴い過剰な餌やりが発生している。例えば一部の観光客がシカせんべい以外の食べ物（プラスチック・包装紙）を与えることで、シカ自身の健康被害が報告されている。（奈良市保健所等が「奈良の鹿愛護会」が管理する特別柵の鹿を2023年10月に調査）また、シカが観光客に慣れすぎて攻撃的になり、シカによる観光客への噛みつき・突進事故が多発している。このような観光体験は観光客の過剰な餌やりやシカの攻撃性の増加により、安全に楽しめる環境が失われつつある。このような観光体験の質の低下の為、奈良公園ではシカせんべいの適量な餌やりを促すガイドラインを策定し、環境保護のため、観光客に対する啓発活動を強化している。

## 5. オーバーツーリズムから新たな観光対策であるレスポンスブルツーリズム

日本の観光産業は、インバウンドの増加により経済的恩恵を受けてきたが、同時にオーバーツーリズムの問題が顕在化している。3章と4章では事例をあげ、現象の解説とオーバーツーリズムの対策をあげてきた。対策の中では予約制や入場制限などの観光客数の制限や人気観光地から地方や新しい観光地への分散化観光の推進やエコツーリズムやグリーンツーリズムの環境負荷を考えたツーリズムの推進を中心に進められている。このように観光地としての価値の保護を考えた施策を進めているが、大きな成果としては表れていない。様々な要因が考えられる。観光客のモラルの問題や今まで日本の観光を先導してきた大手旅行会社を中心とした利益重視の考え方、地域住民を中心としたコミュニティの関わり方などである。その要因を確認しながらの対策が必要とされている。そして現在ではレスポンスブルツーリズムが話題になっている。観光客、旅行関連業者及び地域と

の関りによるレスポンスブルツーリズムの考え方や活動が大きいと考えられる。

### (1) オーバーツーリズムとレスポンスブルツーリズムの関係性

オーバーツーリズムはこれまで解説してきたように、観光客が一部の地域に過度に集中することで、地域住民や自然環境、観光体験そのものに悪影響を及ぼす現象を指す。一方、レスポンスブルツーリズムは、「責任ある観光」を指し、観光による悪影響を最小限に抑えながら、地域や観光客、環境にとって持続可能な形で観光を行うことを目指す（2002年ケープタウン宣言で責任ある観光が明示された）。地域住民の生活を尊重し、環境への負荷を軽減する行動を行い、観光客自身が地域社会や環境に対する責任を持つ事が特徴としてあげられる。

### (2) レスポンスブルツーリズム

レスポンスブルツーリズムの基盤を形成する重要な出来事として、2002年に南アフリカのケープタウンで開催された「レスポンスブルツーリズムに関する国際会議（International Conference on Responsible Tourism in Destinations）」がある。この会議では、観光が地域社会や環境に与える負の影響を軽減し、地域経済に貢献する責任ある観光の在り方が議論され、ケープタウン宣言が採択された。「地域社会に経済的利益をもたらすこと」「文化遺産や環境の保護を支援すること」「地域住民や観光客の双方にポジティブな経験を提供すること」が強調された宣言になった。この背景には1990年代から台頭した旅行業者の“観光の大衆化”が自然環境や生態系に深刻なダメージを与えるケースが増加し、地域住民の生活や伝統文化が観光開発によって圧迫される事例が問題視されるようになってきた事が挙げられる。一方で1990年代にエコツーリズムの概念が広まったことで、観光における環境や地域社会への配慮が議論される土壌が形成されてきた事もこの背景とされる。（この背景として、サステイナブルツーリズムの定義である「環境」「社会文化」「経済」の中で環境の持続可能性があるのがエコツーリズムの考え方

ある。マスツーリズムが招いた環境破壊の是正する考え方がエコツーリズムとしての旅行形態に表れている。)。

### (3) 持続可能な観光との接点

レスポンシブルツーリズムは、1990年代初頭に広まったサステナブルツーリズム (Sustainable Tourism) の概念を補完する形で登場した。サステナブルツーリズムが観光業全体の体系的な持続可能性を重視するのに対し、レスポンシブルツーリズムは観光客や事業者、地元住民などの個別行動や責任に焦点を当てている。つまりレスポンシブルツーリズムの概念は、1990年代後半に登場し、2002年のケープタウン宣言を通じて国際的に認知された。その後、持続可能な観光の実践的なアプローチとして、観光地や観光業界、観光客自身が「責任」を持つべきだという考えが浸透し、観光業における重要な理念の一つとなっている。

### (4) レスポンシブルツーリズムの旅行事業者と観光客の責任

過去 (1960年代以降) に日本の旅行事業者はマスツーリズムに代表されるような大きな集客活動を実施してきた。このマスツーリズムは観光客の大衆化を実現し、日本の観光に良い意味でも悪い意味でも大きな影響を与えた。経済的視点の考え方を優先したため、観光開発、大気汚染、地域の文化へのダメージ等、地域社会や地域の自然、文化に関する多くの問題が発生した。その弊害からエコツーリズムやサステナブルツーリズムへと考え方が変化してきたのである。ただ、日本人観光客のサステナブルツーリズムの考え方は他の国の考え方とまだ開きがある。Booking.com のデータによれば 2024 年の調査では、①「サステナブルな旅行が重要である」と回答した旅行者は、世界の旅行者で 83%、日本の旅行者で 62% だった。②世界の旅行者の 62% (日本 34%) が「よりサステナブルな旅行をすることで最高の自分になれる」と答え、③世界の旅行者 67% (日本 42%) が「旅行中にサステナブルな取り組みを体験することで、日常生活でも、よりサステナブルな生活を意識し

ようと思う」と回答している。

その意味では日本の旅行事業者の場合、“非日常”等のキャッチフレーズで集客し、観光行動にサステナブルな考え方やその責任を指摘していない事業者が多い。同時に観光客の行動変容を促す啓発もまだまだ行われていない。このレスポンシブルツーリズムの基本となる持続可能な観光の実践的なアプローチとして、観光地や観光業界、観光客自身が責任を持つ事が大きいと考える。つまり、「旅行者の消費行動のみが悪影響をもたらしているのではなく、旅行業者などの責任も大きいことを明らかにしたことにある。観光の構造的な問題とオーバーツーリズムの概念に関する研究—利害関係者の観点の相違を事例に—」(崔載弦 2023) 旅行事業者はマスツーリズムから発生した弊害を反省し、これからの責任ある行動に変える事、観光客を啓蒙する事こそが早急に考えるべき活動である。

## 6. 終わりに

オーバーツーリズムは、観光客の急増により、環境破壊・地域住民の生息・観光体験の質の低下などの深刻な問題を引き起こす。

一方で、レスポンシブルツーリズムは、こうした問題を解決し、観光を持続可能なものにするための重要な考え方である。観光は地域経済を支える大切な要素であるが、オーバーツーリズムの問題に直面すると、観光資源そのものが持続不可能になる。「オーバーツーリズムへの反省として“量から質”へ、すなわち数の多さではなく“質”を求めるとの言葉が多く目につくようになった (井上品子, 2021)」。レスポンシブルツーリズムの考え方を取り入れることで、観光地・住民・旅行事業者・旅行者がともに恩恵を受けられる仕組みを作ることが重要な事である。これからの観光は、「訪れる側の責任」と「受け入れる側の適切な管理」の両輪で支えられるべきである。観光地が長く愛されるためにも、持続可能で責任ある観光のあり方を考え実践していくことが求められている。

## 引用・参考文献

- 1) 石本東生・江口久美・岡村祐・西川亮・沼田壮人・後藤健太郎 (2020) 『ポスト・オーバーツーリズム界隈を再生する観光戦略』 10 章 倶知安— 外国化した地域の主権を取り戻す地域住民の模索と努力
- 2) 高坂晶子 (2024) 『オーバーツーリズム増補改訂版 観光に消費されないまちのつくり方』 学芸出版社
- 3) UNWTO (2019) “International Tourism Highlights” <http://www.e-unwto.org/doi/pdf/10.18111/9789284421152>
- 4) UNWTO (2019b) 『オーバーツーリズム (観光過剰)』 都市観光の予測を超える成長に対する認識と対応』 日本語版
- 5) 井上晶子 (2021) 「責任ある観光」：レスポンシブルツーリズムへの問い—観光地における食べ歩き現象を通して、日本国際観光学会自由論集 Vol. 5.
- 6) 田中俊徳 (2024) 『オーバーツーリズム解決論 日本の現状と改善戦略』 ワニブックス
- 7) <https://www.city.fujiyoshida.yamanashi.jp/div/kikaku/pdf/SDGsmiraikeikaku.pdf>
- 8) 富士吉田市 SDGs 未来都市計画 マスタープラン
- 9) <https://www.cnn.co.jp/travel/35221862.html>
- 10) 真子和也 (国立国会図書館 調査及び立法考査局国土交通課 2020) 『持続可能な観光をめぐる政策』
- 11) 崔戴弦 (2023) 『観光構造問題とオーバーツーリズムの概念に関する研究』